

Title	Hypo-Ellipticityの同値類について (超函数と線型微分方程式 I)
Author(s)	平良, 和昭
Citation	数理解析研究所講究録 (1973), 192: 1-9
Issue Date	1973-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/107268
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Hypo-Ellipticity の同値類について^(*)

東工大理 平 良 和 昭

§ 0. 序

本稿の目的は、与えられた作用素の H.E.^(**) の Reduction を、"H.E. の同値類"なる概念を導入して捉えることである。この考えに従えば、どの作用素に Reduction するかということとは、同値類の代表元として何を選ぶかということに対応することになる。

§ 1 では、H.E. の同値類なる概念を導入し、§ 2 では、H.E. の Reduction を行ない、応用として、Grušin [1] の例について簡単にふれる。

(*) 1973 年 3 月 22 日 (木) には、"Generalized Poisson Operator と Grušin の例について" と題して講演した。

(**) 以下、H.E. と略記して、『Hypo-Ellipticity』と『Hypo-Elliptic』の二つの意味に使うが、混乱は生じない。

§ 1. H.E. の同値類

(函数空間) $\{\mathcal{E}^s\}_{s \in \mathbb{R}}$ は, Banach 空間の族で, $s_1 < s_2$ ならば, $\mathcal{E}^{s_2} \subset \mathcal{E}^{s_1}$ となっているとする。 $\mathcal{E}^{-\infty} = \bigcup_{s \in \mathbb{R}} \mathcal{E}^s$, $\mathcal{E}^{\infty} = \bigcap_{s \in \mathbb{R}} \mathcal{E}^s$ とおく。

以下で出てくる $\{\mathcal{F}^s\}_{s \in \mathbb{R}}$, $\{g^s\}_{s \in \mathbb{R}}$, $\{h^s\}_{s \in \mathbb{R}}$ なども, 全て, この性質をもっているものとする。

(正則性) 線型写像 $\alpha: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$ ($s \in \mathbb{R}$) が, " σ で正則性をもつ " $\stackrel{\text{def.}}{\iff}$ 任意の $t < \sigma$ に対して, $e \in \mathcal{E}^t$, $\alpha e \in \mathcal{F}^{\sigma}$ ならば, $e \in \mathcal{E}^{\sigma}$ である。

特に, $t = -\infty$, $\sigma = \infty$ のとき, H.E. という。また, α が σ で正則性をもつとき, $\alpha \sim 1$ とかく。

(正則同値) $\alpha: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$ と $\beta: g^s \rightarrow h^s$ が, " σ で正則同値である " $\stackrel{\text{def.}}{\iff}$ α が σ で正則性をもつことと β が σ で正則性をもつことが同値である。すなわち, $\alpha \sim 1$ と $\beta \sim 1$ とが同値である。

α と β が σ で正則同値のとき, $\alpha \sim_{\sigma} \beta$ とかく。

さて, 『この同値関係による α の同値類の元としてはどのようなものがとれるか』ということが問題になるが, これについては, 次の結果を得る。

基本定理 $\alpha: \Sigma^s \rightarrow \mathcal{F}^s$, $\phi: \mathcal{F}^s \rightarrow \mathcal{G}^s$ とする.

このとき, $\phi \approx 1$ ならば, $\alpha \approx \phi\alpha$ である.

特に, ϕ が H.E. ならば, α が H.E. と $\phi\alpha$ が H.E. とは同値である.

(注意) この定理は, " $\phi \approx 1$ なる ϕ を 左から 作用させる限り正則性は損なわれない " ことを意味している.

(基本定理の証明) i) $\alpha \approx 1$ とする. $t < s$, $e \in \Sigma^t$, $\phi\alpha e \in \mathcal{G}^s$ ならば, $\alpha: \Sigma^s \rightarrow \mathcal{F}^s$ より $\alpha e \in \mathcal{F}^t$ であるから, $\alpha e \in \mathcal{F}^t$, $\phi\alpha e \in \mathcal{G}^s$ である. 従って, $\phi \approx 1$ だから, $\alpha e \in \mathcal{F}^s$. とするが, $\alpha \approx 1$ としたから, $e \in \Sigma^t$ $\alpha e \in \mathcal{F}^s$ より $e \in \Sigma^s$ が従う. よって, $\alpha \approx 1$ が示された.

ii) $\phi\alpha \approx 1$ とする. $t < s$, $e \in \Sigma^t$, $\alpha e \in \mathcal{F}^s$ ならば, $\phi: \mathcal{F}^s \rightarrow \mathcal{G}^s$ より $\phi\alpha e \in \mathcal{G}^s$ であるから, $e \in \Sigma^t$, $\phi\alpha e \in \mathcal{G}^s$ である. とするが, $\phi\alpha \approx 1$ としたから, $e \in \Sigma^s$ が従う. よって, $\alpha \approx 1$ が示された.

(Q.E.D.)

§ 2. H.E. の Reduction

(函数空間) 以下で $\tau < s$ $\{Y_1^s\}_{s \in R}$, $\{Y_2^s\}_{s \in R}$, $\{Z_1^s\}_{s \in R}$

$\{Z_2^s\}_{s \in R}$ は, 全て, § 1 の $\{\mathcal{E}^s\}_{s \in R}$ と同じ性質をもっているものとする.

(作用素) $E: Y_1^s \rightarrow Y_2^s$, $F: Y_1^s \rightarrow Z_2^s$, $H: Z_1^s \rightarrow Y_2^s$,
 $P: Z_2^s \rightarrow Y_1^s$, $Q: Z_2^s \rightarrow Z_1^s$ とする. このとき

$$\alpha = \begin{pmatrix} E, H \\ F, 0 \end{pmatrix}, \quad \beta = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix}, \quad \mathcal{E}^s = \bigoplus_{Z_1^s}^{Y_1^s}, \quad \mathcal{F}^s = \bigoplus_{Z_2^s}^{Y_2^s}, \quad \mathcal{G}^s = \bigoplus_{Z_2^s}^{Y_1^s}$$

とおくと, $\alpha: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$, $\beta: \mathcal{G}^s \rightarrow \mathcal{E}^s$ である.

さて, ここで, α が正則性をもつことがわかっているとき, E に対する正則性を, 何か他の作用素に対する正則性に Reduction できるのかということを問題にしてみよう. これについてわれわれの得た結果は, 次の通りである.

主定理 次の二つの仮定をおく.

(仮定 1) $\alpha = \begin{pmatrix} E, H \\ F, 0 \end{pmatrix}: \mathcal{E}^s \rightarrow \mathcal{F}^s$ が σ で正則性をもつとする. すなわち, $\alpha \sim 1$.

(仮定 2) α に対して, 次のような β が存在するとする:

$$\beta = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix}: \mathcal{G}^s \rightarrow \mathcal{E}^s \text{ で } \alpha\beta \sim \mathcal{C} = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix}.$$

このとき, 次の結論を得る.

(結論) $E \sim Q$.

特に, α が H.E. ならば, E が H.E. と Q が H.E. とは同

値である。

証明のまゝに、補題を二つほどのべる。

補題1

$$C = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix} \sim_{\sigma} \begin{pmatrix} E, 0 \\ 0, 1 \end{pmatrix} = E$$

(証明) i) $C \sim 1$ とする。 $t < \sigma$, $v \in Y_1^t$, $Ev \in Y_2^{\sigma}$ ならば, $F: Y_1^{\sigma} \rightarrow Z_2^{\sigma}$ より

$$\begin{pmatrix} v \\ -Fv \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^t \\ \oplus \\ Z_2^t \end{matrix} = g^t; \quad C \begin{pmatrix} v \\ -Fv \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v \\ -Fv \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} Ev \\ 0 \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_2^{\sigma} \\ \oplus \\ Z_2^{\sigma} \end{matrix} = f^{\sigma}$$

$t = 3$ で, $C \sim 1$ としたから

$$\begin{pmatrix} v \\ -Fv \end{pmatrix} \in g^{\sigma} = \begin{matrix} Y_1^{\sigma} \\ \oplus \\ Z_2^{\sigma} \end{matrix}. \quad \text{よって, } v \in Y_1^{\sigma}. \quad \text{すなわち, } E \sim 1$$

が示された。

$$\text{ii) } E \sim 1 \text{ とする。 } t < \sigma, \quad \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \in g^t = \begin{matrix} Y_1^t \\ \oplus \\ Z_2^t \end{matrix},$$

$$C \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} Ev \\ Fv + w \end{pmatrix} \in f^{\sigma} = \begin{matrix} Y_2^{\sigma} \\ \oplus \\ Z_2^{\sigma} \end{matrix} \quad \text{ならば, } v \in Y_1^t,$$

$Ev \in Y_2^{\sigma}$ 。 $t = 3$ で, $E \sim 1$ としたから, $v \in Y_1^{\sigma}$ 。 従って, $F: Y_1^{\sigma} \rightarrow Z_2^{\sigma}$ より, $Fv \in Z_2^{\sigma}$ 。 故に, $Fv + w \in Z_2^{\sigma}$ より $w = (w + Fv) - Fv \in Z_2^{\sigma}$ である。 よって,

$$\begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^{\sigma} \\ \oplus \\ Z_2^{\sigma} \end{matrix} = g^{\sigma}. \quad \text{すなわち, } C \sim 1 \text{ が示された。}$$

(Q.E.D.)

補題2

$$\ell = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix} \sim_{\sigma} \begin{pmatrix} 1, 0 \\ 0, Q \end{pmatrix} = Q$$

(証明) i) $\ell \sim 1$ とする。 $t < \sigma$, $w \in Z_2^t$, $Qw \in Z_1^{\sigma}$ ならば, $P: Z_2^s \rightarrow Y_1^s$ より

$$\begin{pmatrix} -Pw \\ w \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^t \\ \oplus \\ Z_2^t \end{matrix} = g^t, \quad \ell \begin{pmatrix} -Pw \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -Pw \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ Qw \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^{\sigma} \\ \oplus \\ Z_1^{\sigma} \end{matrix} = \Sigma^{\sigma}.$$

$\tau = 3$ で, $\ell \sim 1$ としたから

$$\begin{pmatrix} -Pw \\ w \end{pmatrix} \in g^{\sigma} = \begin{matrix} Y_1^{\sigma} \\ \oplus \\ Z_2^{\sigma} \end{matrix}. \quad \text{よって, } w \in Z_2^{\sigma}. \quad \text{すなわち, } Q \sim 1$$

が示された。

$$\text{ii) } Q \sim 1 \text{ とする。 } t < \sigma, \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \in g^t = \begin{matrix} Y_1^t \\ \oplus \\ Z_2^t \end{matrix},$$

$$\ell \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix} \begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} v + Pw \\ Qw \end{pmatrix} \in \Sigma^{\sigma} = \begin{matrix} Y_1^{\sigma} \\ \oplus \\ Z_1^{\sigma} \end{matrix} \quad \text{ならば,}$$

$w \in Z_2^t$, $Qw \in Z_1^{\sigma}$. $\tau = 3$ で, $Q \sim 1$ としたから,

$w \in Z_2^{\sigma}$. 従って, $P: Z_2^s \rightarrow Y_1^s$ より, $Pw \in Y_1^{\sigma}$. 故に,

$v + Pw \in Y_1^{\sigma}$ より $v = (v + Pw) - Pw \in Y_1^{\sigma}$. よって,

$$\begin{pmatrix} v \\ w \end{pmatrix} \in \begin{matrix} Y_1^{\sigma} \\ \oplus \\ Z_2^{\sigma} \end{matrix} = g^{\sigma}. \quad \text{すなわち, } \ell \sim 1 \text{ が示された.}$$

(Q.E.D.)

(主定理の証明) まず, 補題1 から

$$E = \begin{pmatrix} E, 0 \\ 0, 1 \end{pmatrix} \underset{\sigma}{\sim} C = \begin{pmatrix} E, 0 \\ F, 1 \end{pmatrix}$$

である。さらに、(仮定2)から

$$C \underset{\sigma}{\sim} Oc$$

である。ところが、(仮定1)から $O \underset{\sigma}{\sim} 1$ だから、

基本定理より

$$Oc \underset{\sigma}{\sim} c$$

となる。さらに、補題2より

$$c = \begin{pmatrix} 1, P \\ 0, Q \end{pmatrix} \underset{\sigma}{\sim} \begin{pmatrix} 1, 0 \\ 0, Q \end{pmatrix} = Q$$

である。従って、以上をまとめれば、

$$E \underset{\sigma}{\sim} Q$$

を得る。

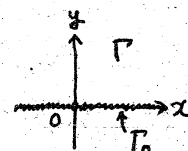
(Q.E.D.)

さて、主定理の応用として、次の例を考えよう：

例 (Grušin [1]) $P = 2$ 次元平面； $P_0 = \{(x, 0) : x \in \mathbb{R}\}$ ；

$$E = \frac{\partial^2}{\partial y^2} + y^2 \frac{\partial^2}{\partial x^2} - i \frac{\partial}{\partial x} + a y^2 \frac{\partial}{\partial x} \quad (a \text{ は複素定数}) ;$$

$F = P_0$ へのトレース；



$H =$ 次式で与えられる P_0 から P へのポテンシャル作用素：

$$H(h(x) \otimes \delta(y)) = \int e^{ix\zeta} e^{-\frac{|y|^2}{2}} \hat{h}(\zeta) d\zeta ;$$

とすると、主定理の(仮定1)がみたされる(平良[2]の§4参照)。 P_0 上の擬微分作用素 Q が、(仮定2)をみたすには、その symbol $q(\xi)$ ($\xi \in \mathbb{R}$) を、

$$q(\xi) \sim \begin{cases} -Cai + \dots & \xi > 0 \\ -2\xi + Cai + \dots & \xi < 0 \end{cases}$$

とすればよいことがわかる。ここで、 C は正の定数である。

従って、 $a \neq 0$ ならば、 Q は $\xi > 0$ については0階の、 $\xi < 0$ については1階の、楕円型擬微分作用素となるから、原点の近傍で H.E. である。(P_0 が1次元であることが本質的！)
よって、主定理から次の系を得る。

系 $a \neq 0$ でない複素定数とする。このとき

$E = \frac{\partial^2}{\partial y^2} + y^2 \frac{\partial^2}{\partial x^2} - i \frac{\partial}{\partial x} + a y^2 \frac{\partial}{\partial x}$ は、原点の近傍で H.E. である。

(注意) $a = 0$ ならば、H.E. でない。実際、 ℓ を適当な正の整数として、

$$u(x, y) = \int_0^\infty e^{ix\xi} \frac{e^{-\frac{y^2}{2}\xi}}{(1+\xi^2)^\ell} d\xi$$

とあげば、 $Eu = 0$ であるが、明らか

$$u(x, 0) = \int_0^\infty e^{ix\xi} \frac{1}{(1+\xi^2)^\ell} d\xi$$

は C^∞ でない。

文 献

- [1] Grušin, On a class of elliptic pseudo-differential operators degenerate on a submanifold, Math. USSR Sb., 13 (1971), 155-185.
- [2] 平 良, Oblique 境界値問題について, 数理解析研究所講究録『函数解析的方法による偏微分方程式の研究』, 1973年1月22日~24日。